

2025年5月25日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教38「憎しみを引き受け」
 レビ23：39～43、ヨハネ7：1～9

「イエスの兄弟たち」（3節）この「兄弟」はイエスさまの肉親です。マルコ福音書にはこの兄弟たちの名前も出てきます。イエスさまが故郷のナザレで伝道したときに、人々がこう言いました。「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか」（6：3）クリスマスの物語にはイエスさまの両親マリアとヨセフの話が出てきますし、イエスさまはマリアにとって「初めての子」とルカ福音書は伝えています。ですからイエスさまに続いて兄弟たち、姉妹たちがいてもおかしいことではありません。福音書を読むとイエスさまが弟たちや妹たちに囲まれて暮らしていたことを想像することができます。そしてそれは特別な家族というよりも、ごくありふれた普通の家族であった。どの家庭にもある家族の日常がそこに見えてくるのであります。

兄弟たちがイエスさまに言いました。「ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちに見せてやりなさい・・・こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい」（3～4節）これは兄弟としての忠告、助言のようなものだと思います。長男であるイエスさまが窮地に立たされている。ユダヤ人からは殺意を向けられ、弟子たちも離れていく。そういう兄の姿を兄弟として黙って見ていいられないのです。「あなたのしている業」（3節）とはこれまでのイエスさまの奇跡と理解してよいでしょう。五千人の供食や、少し遡れば、第2章でカナの婚礼の奇跡もありました。カナの婚礼には母マリアも同席していました。そういう奇跡をこんな田舎のガリラヤではなくユダヤに行ってみんなに見せてやったどうか。そうしたらみんな信じてついてくるだろうと言っているのです。

実は、この兄弟たちの助言は、決してその場の思いつきではなくて、よく考えられたものです。「ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた」（2節）とあります。ユダヤ人には三つの大きな祭がありました。仮庵祭（スコット）、過越祭（ペサハ）、七週の祭（シャブオット）。仮庵というのは、仮小屋、テントのことです。現在でもユダヤ人はテントを張ってその中で食事をして仮庵の祭りを祝います。元々はイスラエルがエジプトを脱出して40年間荒れ野の放浪をしますが、その間も神さまが守り導いてくださったことを忘れないという意味でした。けれども、これがカナン定着後にカナンの農耕社会と結びつき収穫の祭りとなっていました。いざれにせよ神さまがイスラエルの民を養ってくださった。朝にはマナを降らせ、夜にはうずらが飛んでき、イスラエルは養われ旅を続けることができたのです。

兄弟たちは、この仮庵祭に合わせて、ユダヤに行ってイエスさまが奇跡を行ったら、格好の宣伝になると思ったのです。水をワインに変え、五つのパンと二匹の魚で五千人を養う。神さまの養いを感謝し、収穫を祝う仮庵の祭りでそういう奇跡を行ったら、人々はイエスさまの力を思い知るのではないか。この機会を逃す手はない。今こそユダヤでその奇跡を行い、人々を驚かせたらしい。自ら命のパンであることを行動で示したらしい。なかなかのプロデュースです。今、お米が高い。大臣が替わって巷に安くお米が出回ることをみんな期待しています。もしこのタイミングでイエスさまが登場してお米を増やして人々に配ったら一気に人気者でしょう。みんなイエスさまのことを信じるかもしれません。教会に行ったらお米がもらえるとなれば、みんな教会に来るかもしれません。けれども聖書にはこう記されています。「兄弟たちも、イエ

スを信じていなかったのである」（5節）それは信仰ではない。イエスさまはそういうメシア救い主としてこの世に来られたのではない。

イエスさまは「わたしの時はまだ來ていない」（6、8節）と繰り返されています。「時」と訳された言葉はカイロスです。これは機会、チャンスを意味する言葉です。イエスさまはその機会を伺っています。よく「機が熟す」と言います。一番いい時を見定める。イエスさまは、今はまだその時ではないと判断された。やがてイエスさまの時がきます。それはまだ少し後になりますが、第11章のところでエルサレムに入城される話があります。そして第17章では裏切られ逮捕される直前にイエスさまの祈りがありますが、そのときにイエスさまは「父よ、時が来ました」（17：1）と祈られます。それは言うまでもなく十字架の死です。その時を伺っています。

イエスさまは、兄弟たちが求めるような、みんなから王様のようにもてはやされ、人気絶頂のメシアとなることを望まれたのではありません。そうではなくて、人々から罵られ、嘲られ、そして十字架で殺される。捨てられるように死んでいく。そのようにして人々の罪を担われ贖われるメシアとして来られた。そこにイエスさまの「時」があるので。そこにイエスさまの使命があると申し上げてもよい。それは旧約の時代からの預言者の使命であり、例えばイザヤが伝えた苦難の僕としての使命です。その時をどう見定めるのか。その見定める鍵が7節にあります。「世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証ししているからだ」（7節）世はわたしを憎んでいる。イエスさまに対する憎しみ、怒り。それが頂点に達するのが十字架です。人間の憎しみの極み。それは罪の極みでしょう。イエスさまは罪が極まる時を待っておられます。

人類の歩みは、この憎しみと切り離すことはできません。アダムとエバ以来、兄弟殺しのカインとアベルに象徴的に、憎しみと怒りに支配されてきた歴史です。戦争だけではない。毎日のニュースを見れば、事件や事故が起こり、そこにはまた新たな憎しみが必ず生まれています。ちょっとした些細なすれ違いが、家族の中に、親しい友人の中にも憎しみを生み出します。わたしたちの人生はそういうことの連続かもしれません。皆さんもそういう経験があるでしょう。それはどんなに小さなことでも辛いのです。

イエスさまが引き受けられた憎しみ、怒りはどれほどのものかを考えます。でもイエスさまはそのようにして、わたしたち人類の憎しみ、怒りをすべて引き受けてくださり十字架で死んでくださいました。それがイエスさまの「時」なのです。イエスさまが十字架で死なれたのは、仮庵の祭ではなく、過越の祭の時でした。過越祭は、犠牲の小羊が屠られ、それによってイスラエルがエジプトから救い出されたことを記念する祭りです。まさしくイエスさまはご自身が過越の犠牲の小羊として十字架で死んでくださいました。この犠牲によってわたしたちは罪の奴隸から解放されたのです。イエスさまはご自身の命でこの救いの時を満たされました。

天の父よ。イエスさまがわたしたちの憎しみ、怒り、悲しみをすべて引き受けてくださって十字架で死んでくださったことを覚えます。それほどの愛を貫いてくださいました。どうぞこの神さまの恵みの時を覚えることができますように。この救いの時を人間の思いで無にすることはありませんように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。